

2011年4月14日
株式会社 みすず書房

阪神大震災時、精神科医の50日間の記録 『災害がほんとうに襲った時』緊急出版

このたびの東日本大震災に遭遇し命を失われた多くの方々に哀悼の意をささげ、ご家族ご知友を失われた方々には心よりお悔やみを申し上げます。また、被災された数十万に及ぶ方々に対しては心よりお見舞いを申し上げます。現在、被災地を中心に、警察・自衛隊・医師・看護師・地元職員はじめ数多くの人々が、不眠不休の被災者の救援活動にあっています。このような時にあたり、16年前の阪神大震災後に私どもで刊行した二冊『1995年1月・神戸』『昨日のごとく』を読みたいという声新たに起こっています。そこで、私どもとしては、二著の出版に力を注がれた中井久夫先生の文章を再編集し、ここに新たに刊行することにいたしました。歴史から学ぶ・「神戸」から考える。一精神科医が関与観察した阪神大震災の50日間の記録と一年間の回顧です。

中井久夫『災害がほんとうに襲った時——阪神淡路大震災50日間の記録』

家屋の倒壊、近親者の死、長びく避難所生活…… 阪神大震災は被災者たちに、計り知れない心の傷を負わせた。「なにかやらなくては」——みずからも被災者である神戸在住の精神科医とナースがまず立ち上がった。つぎに全国から駆けつけた医療ボランティアたちが。彼らが疲れてくると、さらには援助者を支える援助者もやってきた。1995年1月17日から50日間。被災地では何が起こり、何が必要だったのか。1995年3月に弊社より刊行した『1995年1月・神戸——「阪神大震災」下の精神科医たち』から、編者・中井久夫が記した「災害がほんとうに襲った時」に、今回の震災に寄せた文章「東日本巨大災害のテレビをみつづつ」を加え、緊急出版いたします。

4月20日刊行・1260円(税込)・四六判・並製・144頁・ISBN 978-4-622-07614-8

電子書籍版もリリース予定 600円(税込)

中井久夫『復興の道なかばで——阪神淡路大震災一年の記録』

被災地のみならず全国に共同体感情のようなものが生まれ、誰もが被災地に眼をそそいでいた阪神大震災から1年。だが、あれから避難所で生活していた人たちは、ボランティアはどうなったのだろう。被災民への補償は、今後の地震対策は、町の復興は？ ところに傷を負った人たちへのアプローチは、進んでいるのだろうか。1996年3月に弊社より刊行した『昨日のごとく——災厄の年の記録』から、共著者・中井久夫による1年の記録を出版いたします。

5月10日刊行予定・1680円(税込)・四六判・並製・176頁・ISBN 978-4-622-07615-5

電子書籍版もリリース予定 800円(税込)

中井久夫(なかい・ひさお) 1934年奈良県生まれ。京都大学医学部卒業。神戸大学名誉教授。精神科医。著書『中井久夫著作集——精神医学の経験』全6巻別巻2(岩崎学術出版社、1984-91)『分裂病と人類』(東京大学出版会)『記憶の肖像』(1992)『家族の深淵』(1995)『アリアドネからの糸』(1997)『最終講義——分裂病私見』(1998)『西欧精神医学背景史』(1999)『清陰星雨』(2002)『徴候・記憶・外傷』(2004)『時のしずく』(2005)『関与と観察』(2005)『樹をみつめて』(2006)『臨床瑣談』『日時計の影』(2008)『臨床瑣談・続』(2009)『統合失調症』全2巻(2010、以上みすず書房)ほか。共編著『1995年1月・神戸』(1995)『昨日のごとく』(1996、共にみすず書房)。訳書としてみすず書房からは、サリヴァン『現代精神医学の概念』ほか、ハーマン『心的外傷と回復』、カーディナー『戦争ストレスと神経症』(共訳)、さらに『カヴァフィス全詩集』『リッツォス詩集 括弧』ヴァレリー『若きバルク/魅惑』『コロナ/コロナ』などが刊行されている。



みすず書房

お問合せ先：守田 morita@msz.co.jp 山^{さんろく} 山^{さん} san@msz.co.jp
113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21 <http://www.msz.co.jp>
tel. 03-3815-9181 fax 03-3818-8497

『災害がほんとうに襲った時』本文より

「東日本巨大災害のテレビをみつづ」

2011年3月11—28日

「ジャーナリストは電話をくれて、何をすればよいですか、という。(…)私のいえるのは、まず、被災者の傍にいてくれることである。誰か余裕のある人がいてくれるのがありがたい。それが恐怖と不安と喪失の悲哀とを安心な空気で包むのである。」

1995年1月17日夜—1月18日

「現実と相渉ることはすべて錯誤の連続である。治療がまさにそうではないか。指示を待った者は何ごともなしえなかった。統制、調整、一元化を要求した者は現場の足を引っ張った。」
「精神科救護所のネットワークは、誰が命令したわけでも指示したわけでもなかった。片手で数えられる中堅精神科医が動きながら形づくっていったものであった。」
「救援物資の中の薬は内科の薬ばかりで向精神薬は含まれていなかった。私はこの事実を知って、東京の精神科医に次々と電話をかけて、この事実を知ってほしい、誰かに伝えてほしいと頼んだ。麻薬取締法違反ではないかという異議があったことは後に知った。」
「総じて、役所の中でも、規律を墨守する者と現場のニーズに応えようとする者との暗闘があった。非常にすぐれた公務員たちに私たちは陰に陽に助けられた。」
「地震と同時にいやおうなしに活動を始めたのは当直医、夜勤ナースであった。いきなり「状況」の中に投げ込まれ、倒れた家具の中から這い出し、開かない扉をこじあけて彼ら彼女らは待たなしの救出医療に当たった。もっとも不眠不休だったのは彼ら彼女らである。」

1995年1月20—22日

「一般にボランティアの申し出に対して「存在してくれること」「その場においてくれること」がボランティアの第一の意義であると私は言いつづけた。(…)待機しているのを「せっかくならぶらぶらしている(させられている)」と不満に思われるのはお門違いである。予備軍がいてくれるからこそ、われわれは余力を残さず、使いきることができる。」
「〔精神科医〕ボランティアが問題を掘り起こしたままでわれわれにゆだねて帰るのは困る」と私は言った。たとえばその後有名になってしまった「心的外傷後ストレス症候群」(PTSD)の事例を引き受けたならば、最後は電話でもいいから、一年は継続してかかわる覚悟でいてほしいと私は言った。」
「行政当局が外部の応援を断ったのには接待や宿泊の世話が大変だという本音があった。(…)多少ともPTSDの症状を呈していた現地の職員は来援者には奇異に映ただろう。「彼らには帰るところがある」という感情が来援のヘリコプターを見送る側に働いたこともあった。しかし、このような齟齬は時とともに解消し、自然発生的なコーディネート・システムによってすべてが円滑となった。」

1995年1月23日

「多くの精神科医はPTSDについて語っている。しかし、われわれの関係者の私への報告によれば、避難所のようにむきだしに生存が問題である時にはこれは顕在化しない。おそらく仮設住宅に移住した後に起こるのであろう。」

当面の問題

「私たちは涙もろくなっていた。いつもより早口で甲高い声になっていた。第三者からみれば躁状態にみえたかもしれないが、実際には、自己激励によるエキサイトメントであったと思う。万一「空しい」と感じてしまえばそれこそコトだと私は思った。」
「黄色を主体とするチューリップなどの花々は一九箇所の一般科ナース・ステーション前に漏れなくくぼられ、患者にもナースにも好評であった。暖房のない病棟を物理的にあたためることは誰にもできない相談である。花は心理的にあたためる工夫の一つであった。」
「校長先生たちはある意味ではもっとも孤立無援である。避難民には突き上げられ、市にはいっさいの人員援助を断られ、そして授業再開への圧力がある。災害精神医学というものを曲がりなりにも知っていた精神科医とちがって、校長先生たちは災害においてこのような役割を担おうとは夢にも思っておられなかったはずである。」
「コミュニティが崩壊しなかった証拠はいくつもある。街の物価が突然安くなった。(…)こういう状況では頭から人を信じてしまうか、頭から疑ってかかるか、どちらかしかない。神戸市民は前者を選んだのであろう。」

当面の問題2

「実に多くの人が、この状況にあって「ただでものをもらう」ことに抵抗を感じていた。初期にはそのためのためらいがあった。かなりの神戸市民は政府の援助を争って受けたのではない。心理的抵抗を乗り越えてようやく受けたのであることを彼ら彼女らのために言っておきたい。」

1995年2月24日からみて

「終わったという感じが流れているね、まだ不通の電車も避難所もあるのに」「四、五〇日しかスタミナは続かぬのだよ、生理的に」「その間に主なことをやってしまう必要がありますね。われわれはやりお世話のだろうか。」

「あとがき」2011年3月25日

「これが役に立つだろうと判断したのはノンフィクション作家の最相葉月さんと、私は最初何を言いたしなかつたのかときよとんとしたのが事実である。」

 **みすず書房**

お問合せ先：守田 morita@msz.co.jp さんろく 山根 san@msz.co.jp
113-0033 東京都文京区本郷 5-32-21 <http://www.msz.co.jp>
tel. 03-3815-9181 fax 03-3818-8497

『災害がほんとうに襲った時 — 阪神淡路大震災 50 日間の記録』
『復興の道なかばで — 阪神淡路大震災一年の記録』

いまなぜこの 2 冊の出版を

2011 年 4 月
みすず書房

東日本を襲った巨大震災は想像を絶する大津波による広汎な被害を引き起こし、多くの人々の尊い生命を奪いました。被災され、現実の困難に直面されている方々にはただ、早い復興を願わずにはられません。福島第一原子力発電所の事故による、放射性物質の拡散と、電力不足による経済・社会活動の停滞も、この後どれほどの悪影響を及ぼすかは、現時点では想像もつかない状態です。

今回、緊急に刊行するこの 2 冊は、1995 年におきた阪神淡路大震災の記録、『1995 年 1 月・神戸』『昨日のごとく』を元とし、編者である精神科医中井久夫先生の「災害がほんとうに襲った時」を中心に、再編集したものです。刊行の契機は、ノンフィクションライター最相葉月さんによるこの記録への評価と行動でした。最相さんは、救援活動に携わる医師や看護師、カウンセラーら病院関係者、後方支援の方々、さらにこれから支援を考慮しておられる方々にこの記録を届けようとの思いを持たれ、素早くサイトを立ち上げられました。前文に最相さんはこう書かれています。「ここには想定外の災害に初めて見舞われた一人の医師の逡巡、苦しみ、気づきがあります。災害の種類や時代を超えた普遍的なメッセージがあります。」「災害がほんとうに襲った時」は下記のサイトにて閲覧することができます。

<http://homepage2.nifty.com/jyuseiran/shin/>

小社は、阪神淡路大震災当時に出版したこの 2 冊をはじめ、災害について考えるための出版物の刊行を折々において行ってまいりました。災害の種類や規模や時代状況が異なるとはいえ、引き起こされた災害から学び、教訓を蓄積することは、危機への管理や予想せぬ災害に備えるためにも、不幸にして災害発生後は回復へと向かう道筋にひとつの方向性を示すことができる、との思いからでもありました。版を新たに刊行するこの 2 冊は阪神淡路大震災の発生から、1 年後の回復にいたるまでのプロセスに意志的に関わった一精神科医の観察の記録です。16 年という時を経ているとはいえ、当時の経験から学ぶ点は多く、今回の災害にあたって書かれた中井先生の一文とともに、この時期に、編集された「本」としての刊行をすることには大きい意義があり、出版社としてできるひとつの役割であると判断いたしました。速報性をもったネットによる発信、編集された「本」というかたちでの出版、それぞれのメディアの特性は、より広く、より長く必要とする方々に届けることを可能にしています。今回の出版が、災害および災害後の課題解決に少しでも役立てることを願うとともに、被災された地域の日でも早い復興を心より願ってやみません。

新たに刊行する 2 冊は、広い読者に届けるため、電子書籍による発行も行うとともに、5 月刊行の『復興の道なかばで』から「1996 年 1 月・神戸」は準備でき次第、小社ホームページにて掲載いたします。